

路上生活者の個人史

第 14 回

竹中尚文

岡崎 光彦 氏(仮名)

1959 年 11 月生

私は大阪府北部で生まれました。昭和 34 年生まれですので、64 才です。生まれたときの家族構成は、両親と父方の祖母と兄とで 5 人家族でした。私が小学校に入学して間もなく、祖母が亡くなりました。父親が働きに出て、母親は専業主婦でした。父親は真面目に働く人でしたが、お酒が入ると人が変わるというか、あまりいいお酒ではありませんでした。

私は地元の公立小学校と中学校に通いました。高校は私立の全寮制の学校でした。交通機関のないような山の中の学校でした。毎朝 3 時に起床して全員で床を磨いて、マラソン

をしてから一日が始まる学校でした。なかなか厳しい高校生活でした。その高校に進学した理由ですか。中学校時代の私は素行が悪くて勉強もしなかったのもので、先生が高校進学を諦めるようにいったのです。両親が「高校は出ておけ」といって探してきた学校だったのです。きびしい学校生活だから逃走をする生徒もいましたよ。けれど、交通機関のない山の中ですからすぐに捕まりますよ。捕まって連れ戻されるのです。私は馴染めましたから、つらいという思いもなく卒業をしました。卒業してから、実家に帰って職探しをしました。

就職は、自衛隊に入りました。4 年間、任期満了しました。高校生活と

比べて、それはラクでした。課業、自衛隊では仕事といわずに課業というのですが、課業が終わればテレビを見てもいいし、ラジオを聞いていても自由でした。買い物にも出かけることができます。いい時間を送りました。私の人生で最もいい時代ですし、尊敬する人は自衛隊の時の上司です。私の所属した部隊の班長です。だから、もっと自衛隊にいたかったのですが、当時は試験があったのです。その試験に通っていただらずっと自衛隊にいたと思います。

自衛隊を離れたのが 22 才の時でした。それから仕事をさがして、ハツリ屋に行きました。ハツリ屋というのは、コンクリートをハンマードリルとかで削ったり割ったりするのです。解体工事現場とかでする仕事です。そうですね、厳しい仕事です

けど体力はありますから大丈夫でしたよ。ハツリ屋は 46 才か 47 才ぐらいまでしました。不景気で仕事が無くなってきたのです。続けたかったけれど、仕事が無くなったら、住む所もなくなりました。それまでは、親方が借りてくれているアパートとかに住んでいました。

住む所も仕事もなくなったので、友だちの所に転がり込んだりして、日雇いの仕事を探して食いつないでいました。60 才を超えたところで生活保護をもらえるようになって、アパートで暮らせるようになりました。

これからの夢ですか。特に夢はありません。大きな金額のお金も欲しいとも思いません。好きな音楽を聴いて、本を読んでいるのが幸せです

何がいい生活だろう？ 何が自分らしく生きることなのだろう？ どんな人生がいい人生なのだろう？ 岡崎さんの話を聞いていて、そんなことを自分に問いかけた。